キリスト教の変容⑤

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

ペンテコステ派の信者は自らをエヴァンジェリコ（福音派）と呼ぶことが一般的だが、クレンチという呼称も使う。クレンチとはポルトガル語で「信者」を意味する価値中立的な言葉である。しかし、彼らがそのように名乗るとき、それは信仰熱心な「信者の中の信者」であることの表明であると解釈することができる。信者は「クレンチは教会を混同しない」「クレンチの人生は教会にある」と表現する傾向がみられる。ペンテコステ派のなかでも特にネオペンテコスタリズムの場合は、信者らがブラジルの宗教的多元状況を前にして、カトリックやアフロブラジリアン宗教を否定することによって極めて明確な自己規定を行い、自らの宗教的アイデンティティを確立させていることが窺える。それゆえ、外部の者が彼らをクレンチと呼ぶとき、「狂信者」というネガティブなイメージが付与されることがある。

ネオペンテコスタリズム

ブラジルでは、1990年代以降拡大したネオペンテコスタリズムの教会が、毎日のようにテレビやラジオで宣教番組を流し中堅都市に大きな教会を建てるなど、露出度が高く目立った活動を行っている。ここで、そのなかでも特に注目される教会の一例としてウニベルサール教会を取り上げ、その発展の要因を具体的に考察することにしたい。なお、2000年のブラジル地理統計院による国勢調査によると、ブラジルのプロテスタント信者のうちペンテコステ派は71%であり、ネオペンテコステ派に限ると24%となっている。

マックス・ヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで資本主義を推進させた人びとの信仰を支えたのがカルビニズムの禁欲主義で、その具体的実践として勤勉な職業労働があったことを明らかにした。しかし、ネオペンテコスタリズムでは現世欲と消費が正当化され、それらは個人が享受することのできる当然の権利として語られ、そのことが信者数拡大に繋がっている。このように、ネオペンテコスタリズムは従来のプロテスタンティズムのような禁欲主義を説かない。

発展の要因

先月号で述べたように、ユニバーサル教会の集会では諸悪の根元が当人の「罪」にではなく「悪魔」として外在化させられる。キリスト教で伝統的に語られてきた「罪人」という認識は捨象され、信者自身の「罪」は問われない。説教では、牧師が壇上で神に祈り、涙を流し、人びとと歌声を共にする。牧師は、「私はこんな状況に我慢できない」という言葉を信者と共に何度も大きな声で繰り返す。その姿は信者の代弁者そのものだといえる。牧師のメッセージは、信者各自に「被害者としての自己」を正当化するようにみえる。苦しみに喘ぐ個人は、いわば権利を剥奪された被害者として、その場で失われた自己を回復することができるのである。それがネオペンテコスタリズムにおけるひとつの救済の姿であり、教会に対する信者の魅力なのである。

説教では収入の十分の一に相当するディジモと呼ばれる献金が奨励される。献金はいわば金銭的、あるいは健康や職業といった状況的な救済を得るための先行投資としても理解されている。たとえば、筆者が調査したレシーフェ市のカテドラル（大聖堂）教会では「100万レアルの収入を得たい人は10万レアルを先ず献金しよう」とか「たとえ1レアルでもいいから、献金をしよう。献金には神の祝福が注がれて、その何倍ものお金になって返ってくる」というような、投機的な献金が勧められている。このような先行投資型の献金制度は、資本主義的かつ投機的な思考パターンを身につけた都市住民に説得力を持っているとみられる。

その他、発展の要因として以下の事柄をあげておこう。ユニバーサル教会は、サンパウロのテレビ会社を買収し、毎日宣教番組を全国放映しているほか、ラジオでも同様の番組を流している。また、週刊の新聞も発行しており、メディア布教、文書布教に熱心である。テレビやラジオ番組では、信者の体験談が語られ、同様の苦しみを抱えている人びとを共感させ、教会へと足を向かわせる。先のカテドラル教会には、15名の牧師とオブレロと呼ばれる牧師の援助を行う者が200名登録されていた。牧師は聖職者であり、オブレロは一般信者である。牧師の平均年齢は若く、筆者がインタビューを行った19歳の牧師は17歳で牧師になったという。そのような若手の牧師が信者の相談にのる。昼間でも相談のためにやってくる人は多く、ほとんどが女性であり、概して牧師は懇切丁寧である。このような対面接触的な相談方法に魅せられる都市住民は多いとみられるが、カトリック教会に似たような信者指導体制が普及していないことの意味は大きい。

次に、アフロブラジリアン宗教との関連性がある。ウニベルサール教会は、アフロブラジリアン宗教の諸霊を悪魔として攻撃し、毎週金曜日の「解放の集会」では、信者に憑依した悪魔を除霊するという儀礼を行っている。たとえば、ポンバジーラと呼ばれる娼婦の霊が老女に憑依するという光景を筆者は何度か見かけた。筆者のインタビューに、ある牧師は「ほぼ全員がアフロブラジリアン宗教の悪魔に騙され疲れてやってくる」と語った。ブラジルにおけるアフロブラジリアン宗教の受容度の高さもネオペンテコスタリズムの発展の要因になっているのである。

「ディジモの強制は人びとを搾取する詐欺である」と、ユニバーサル教会はしばしば非難される。また、教団が拡大するにしたがってメディアでは様々な告発も行われている。それにもかかわらず人びとに受容され続けているという事実は、たんに洗脳といったありふれた言葉でこの伸展ぶりを片づけてしまうことが不十分であることを物語っている。

ユニバーサル教会は日本に在住するデカセギの人びとを含め、米国のヒスパニック系住民、ポルトガルのブラジル系住民と、グローバルに展開している。近年のネオペンテコスタリズムの急成長は、マイノリティとしての個人や集団が位置づけられたグローバルな社会的周縁性を露わにしているといえるだろう。人びとの救済にたいする普遍的な願望と今日的な欲望の正当化の構図のなかに、功利主義的な解決をも良しとする彼らの現代的な「救済」が垣間見える。それは、カリスマ刷新運動とも救済次元を共にする「今・ここ」での救済である。さらに、この救済次元は、今後述べていくニューエイジ、カルデシズム、そして日本の新宗教のメッセージと競合しているのである。